

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日  
今期元月十二月一日発行  
百二十二巻第十二号

# ホトトギス

十二月号



## 風雅の小筥〔二十三〕

廣太郎

前回は結局本論に辿り着けず申し訳無かったが、電子辞書の話で前回終ったが、殆どの方がお持ちであり、今や吟行には欠かせなくなつたその電子辞書である。掌に収まる程の大きさで、国語辞典だけでも中に数種類搭載されており、英和、和英は勿論漢和辞典、百科事典や趣味に關係するマニアックな辞典等この大きさを百種類以上の辞書類が搭載されていて、小さな鞆で持ち歩けるといふ便利さに、少なくとも俳句会においては書物の辞書に取って代られた感があるが、一台で様々な辞書が引けるが故の混乱がある。先月申し上げた。それは結論から申し上げると、ホトトギスの歳時記、電子辞書では「季節便覧」として搭載されているが、その季節と、広辞苑等の国語辞典の見出し語の、特に送り仮名が微妙に違うケースが多々ある。例えば一つの例を挙げると「秋惜む」と季節便覧には掲載されているが、広辞苑では「秋惜しむ」となっている。現代の国語教育といふ観点からは、確かに後者の方が表記としては正しいのかも知れないが、俳句、特に「ホトトギス」で採用している使い方は特殊なのかも知れないが国語辞典とは微妙に異なるのである。最近雑詠等の皆様の御投句でも、歳時記ではなく、国語辞典に準じた送り仮名の使い方を、特に季節にされるようになってきたとお見受けするが、折角花鳥調詠の伝統俳句を勉強なさつておいでであるので、季節は是非歳時記の使い方に倣つて頂きたいと思う。そして、是非「ホトトギス」本誌を先ず精読して頂き、御自身の句は勿論、全作品も味わつて頂きたいのである。

旬日記 汀子

平成三十年十二月十五日 俳誌に投句するため

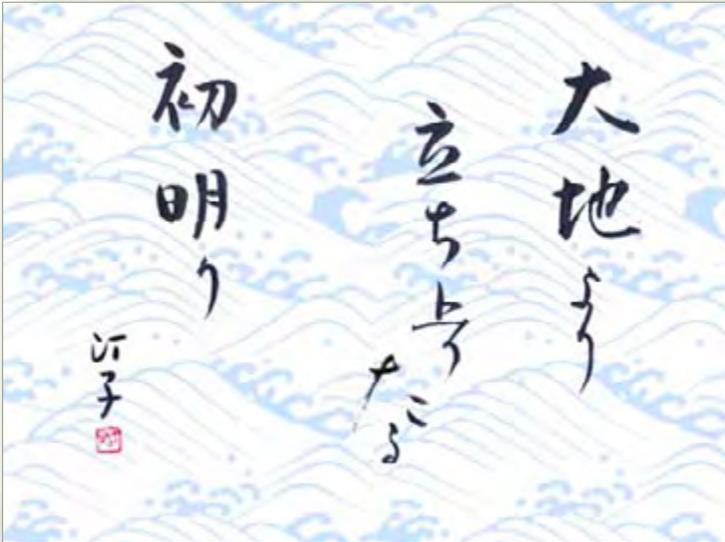
氣力取り戻さねばとて冬至かな  
年老いしことを忘れてゐし師走  
アメリカに帰る娘に述ぶ年賀かな  
氣のつきし自らの齡去年今年  
健康に過信ありしか年惜む  
これよりは日々心して去年今年  
朝風呂に風邪を怖れて籠りをり  
残されし命の日々の年迎ふ  
忘れぬし命の果てる日よ冬よ  
生きて行く日々大切に去年今年

十二月十九日 夏潮句会

先のない人生の今紅葉濃し  
染まりたるままに落葉となりしもの  
限りある命を抱き年迎ふ  
マスクの眼にこに主治医男前  
全快とまでは行かねど師走かな  
共に病む友を思ひてゐるしはす

〔柿〕へ出句

病むといふ不義理を重ねたる師走  
初雪のありしと氣づきたる家居  
体調の戻り来しこと年迎ふ  
立ち止まることも時には年の暮  
刻々の過ぎゆくものにある師走



廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年十二月一日 芦屋ホトトギス会

鳩の湖水凸凹にとて暮るる木の葉散る時の流れを諾ひておでん屋の常連といふ枢機卿

取り留めし命の叫び虎落笛サントラ居ることを信じて八十路かな虎落笛兜太迎へに來たと母

十二月一日 青嵐会菅原例会  
どちらかといふと顔見世よりオペラ短日の病室仕事山積み

十二月四日 カトリック新聞選者吟  
顔見世や片岡我當てふ俳徒退院の早まりさうや日短

十二月六日 蕉心会忘年句会  
退院といふクリスマスプレゼント神迎して退院の人迎へ

暮早し命取り留めたる人に突然の押せ冷たく聞いてをり冬帝の報し戻されし命とも

留守の戸を押せば山茶花散り初むるもう遠出来ぬ身となり冬ざる散り敷いて山茶花雨に膨らめる

十二月八日 九州ホトトギス同人会 大会  
雲を抜け眠る山抜けて着陸す千両の赤とは句碑の伽として

碗琴の音色寒灯潤ませて柿右衛門皿寒灯をはみ出して

十二月十日 朝日カルチャー若草句会  
神木を要としたる枯木立寒林に肥前の空の降りてくる

十二月十日 朝日カルチャー若草句会  
牡蠣食うて厚岸の旅締め括る

退院の母は冬日を背負ひつつ枯木立命の鼓動秘めてをり

十二月十一日 ひまわり俳壇選者あいさつ  
千年の樹齡を染めて初明り湯ざめして母の大事を聞く電話

十二月十三日 十筆会忘年句会  
見舞品羽子板市に求めもし冬木の芽タワイ見上げる角度かな

十二月十四日 六甲会  
恙身の母には湯ざめ許されず水洩も憚る母の恙かな

十二月十七日 北國文芸新年詠  
運転と河豚は諦めしてふ母河豚の宿平家果てたる海指呼に

十二月十八日 北國文芸選者吟  
水洩は嫌啜る顔もつと嫌去年今年母の看取といふ生活

十二月十九日 田鶴近詠  
祈ること願ふこと多々聖夜ミサ諦めることも肝心去年今年

十二月二十日 登高会忘年句会  
永遠の命初日に問ひもして初鶏を祈りの声と聞かまほし

十二月二十日 前議員句会  
ハラソといふ恵方にはまだ遠く神の手に掛けられし初暦かな

十二月二十一日 廣邦会忘年句会  
日本の未来を秘めて冬木の芽寄鍋や命の尊の糧として

十二月二十二日 日本俳壇俳句協会神奈川・東京高部会  
鍋焼や海鳴り遠き港町冬うらら虚子の世語る水川丸

十二月二十三日 野分会東京例会  
鴨の陣とは水川丸盾と川雲ちぎれちぎれ寒天出来上る

十二月二十五日 若水句会  
赤煉瓦倉庫丸ごとクリスマス水仙花海恋ふ色として楚々と

十二月二十三日 野分会東京例会  
孤高てふ主張都心の冬紅葉納句座佳人の白に引き締まる

十二月二十三日 野分会東京例会  
君の居ることがサントラのプレゼント虎落笛恙の君の呻きとも

十二月二十五日 若水句会  
赤く来てサントラクロス黒く去る虎落笛免許返納せし胸に

十二月二十六日 目黒学園句会  
冬帽を被るより詩心かな枯芝の風の爪弾く狂詩曲

祭壇のポインセチアといふ矜持祭すよりポインセチアのチャペルかな

ポインセチア百万鉢のカテドラル百句程この冬帽の授かりて枯芝に羽を休めてゐる命

# 雑詠 廣太郎 選

五月この美しき朝歩かねば 相模原 木村享史  
 書架高く置く虚子の書は黴びさせず 同 同  
 雨に洗はれし肌理美し大蚯蚓 同 同  
 点滴のリズム涼しく動き出す 神戸 千原叡子  
 繋がれる胎内外の管涼し 同 同  
 リハビリの骨の鳴る音汗涼し 同 同  
 まづ探す延長コード走馬灯 同 立村霜衣  
 走馬灯壁を揺らしてをりにけり 同 同  
 うつろひといふは淡くて走馬灯 同 同  
 梅雨に入る屈してならぬリハビりに 福山 竹下陶子  
 リハビりは神の訓練梅雨ぬくし 同 同  
 三千の紫陽花に水やる住持 同 同  
 夏霧の切れ間戦国時代見ゆ 神戸 藤井啓子  
 岐阜提灯消え鶉の町の眠りけり 同 同  
 扇風機 蔵の百年回しをり 同 同  
 一夜さの風に細りし黄菅かな 同 山田佳乃  
 万緑に雨の青さを足す三瓶 同 同  
 日の差して翅の軽さや梅雨の蝶 同 同

島ひとつ割れんばかりに蟬鳴くよ 東京 今井千鶴子  
 島裏は波ひたひたと蟬涼し 同 同  
 思ひ出はただ蟬の声ばかりなる 同 同  
 老鶯の一喝したり吾も一語 神戸 後藤比奈夫  
 老鶯の鳴いてこそなる滝の奥 同 同  
 紫陽花にわが家アルカリ性の庭 同 同  
 黒揚羽影の化身となる乖離 香川 湯川 雅  
 水音を聴く涼しさを乞ふやうに 同 同  
 草叢の受継いでゆく青田風 同 同  
 令和なる八月よ長崎の鐘 神戸 山西商平  
 ヘルメット三つ目深に三尺寝 同 同  
 鉄と玻璃風鈴二つ風二つ 同 同  
 百合開きけり沈黙に耐へかねて 袋井 湖東紀子  
 外海に出て夏潮のうねりかな 同 同  
 日にまみれつつ夏潮に遊びけり 同 同  
 梅雨の灯の人語のやうにともりけり 熊本 岩岡中正  
 梅雨深ければ世に遅れたるごとし 同 同  
 サングラスして原爆を考へる 同 同  
 蜜豆を食べて銀座の雨の窓 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 海の日海遠ざけてをりし雨 同 同  
 夏潮と青空分かちゆく航路 同 同  
 商店街小春の空の狭く濃く 東京 今井肖子  
 耳元をかすめて寒き羽音かな 同 同  
 年忘ひきぎつてゐる大欠伸 同 同

# 雑詠句評（十一月号より）

## 夏帽に和服の虚子の思ひ出を

神戸

千原叡子

虚子先生は生涯和服を通した師であつた。虚子先生の生前を知る人も少なくなつた現在叡子さんだからこそこの様な句が出来たものと思う。私も虚子先生の指導を十七歳から二十一歳まで受けた一人だけだけに共感出来る一句である。私は鹿野山神野寺の木洩日の下を紐のついた麦藁帽を被つて境内を歩いて居られた虚子先生が印象に残っている。その時漱石や鷗外などと深交のあつた人だつたと思いつつ圧倒された記憶がある。（保佳）

勿論虚子は写真でしか見た事はないのだが、その多く、いや全部と言つて良いかも知れないが和服姿である。作者は生前の虚子とは実際お会いになつておられたわけで、やはり和服、そしてこちらにも写真で見る限りパナマ帽も夏には被つていたようだが、思ひ出が涼しく語られている。（廣太郎）

## 森は今青春時代風薫る

袋井

湖東紀子

風薫る・六月の季題。

さて掲句、薫風が森を吹き渡るこの時期、森は年間を通じて最も旺盛に枝葉を繁茂させ、青葉の色も、かぐわしい香りも、森全体が輝いているのである。

ついでに付言すれば、樹木が旺盛に成長するとき、炭素同化作用も活発になり、おいしい空気が森に充滿する。さらに、ストレス解消に役立ち、そして殺菌効果のある物質を持つ、フィトンチッドと云う揮発成分の芳香物質が森全体を覆い尽くすのである。

この時期の森は、吹き渡るすがすがしい薫風と相俟つて、まさに、青春時代、真つ盛りなのである。（とほ歩）

ある森林公園に行つた時、其処には一本の木から林となりその後森として成長して行き、木の種類もだんだん入れ替つて行く姿を解説している掲示があるのを見た記憶があるが、それこそ何万年というサイクルで姿を変えて行く。その若々しい時代を「青春時代」と表現したところが雄大である。（廣太郎）

天地有情

心子選

台風のそれし三瓶へ旅一路  
 夜遊びや梅雨荒るるとも三瓶山  
 朝光を弾き返して春の霜  
 残雪を六甲嵐烟らせて  
 七夕の笹のおどろく百二歳  
 入谷より鉢の朝顔着く日なり  
 梅雨憂しとせず句を作り句を選ぶ  
 ふと淋し夏至を過ぎたる夕日見て  
 病室へ届く見舞の立版古  
 予後の目途立ちしを伝へ露涼し  
 何よりもビールが好きで瘦せてゐて  
 ビールさへあれば留守番するといふ  
 あまつさへ激震の地へ梅雨出水  
 御身いよよいたはりたまへサングラス  
 新元号祝へる鉢のチューリップ  
 殉職の乙女峠や白木蓮  
 滝音に心眼開きをりにけり  
 浴衣着て手足思はず助き出す

長岡 安原 葉  
 同 稲畑廣太郎  
 東京 後藤比奈夫  
 神戸 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 神戸 千原叡子  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 神戸 和田華凜  
 同

ヨット航く空と融け合ふところまで  
 初嵐一本松に韻きけり  
 朝顔のひそと夕べに咲くことも  
 口開けてこそその通草と思ひけり  
 見えてより大門遠し日の盛り  
 月いつか踊の渦に消えてをり  
 蜘蛛の囿に触るれば蜘蛛の向ひくる  
 早畑生まるるものを秘めてをり  
 花莫莖や庭へ向きたる母の席  
 父母の在せる空へ虹の橋  
 打水をせしかに墓所の通り雨  
 虹消ゆるまで御墓前を去り惜む  
 病室の暇持て余す昼寝かな  
 昼寝覚病窓の景変りなく  
 夏水炭やのおやぢ手をぬらし  
 何となくおしやれをしたく藍浴衣  
 阿修羅像拝し心を洗ふ夏  
 ポストまで噴水の傍通る常

同 三村純也  
 同  
 東京 大久保白村  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 神戸 浜崎素粒子  
 同  
 東京 山田閨子  
 同  
 金沢 藤浦昭代  
 同  
 東京 河野昭彦  
 同  
 同 笹倉 潤  
 同  
 吹田 大橋 暁  
 同